

細雪

1982年夏の盛り、市川崑監督から電話があった。

「恵子ちゃん、帰って来てや」。いつものことだった。初対面は京都にいた私を前触れもなく訪れて「おとうと」

書屋の履歴

子 恵 岸

②

豪華スター競演で仲介役

ミスキャスト・序列：「最高」と監督

殺人鬼でも、強盗でも、恩人と仰ぐ監督の依頼に応じる覚悟はできていた。ただし私はアクション物やミステリーが好きではない。市川監督の美しい映像、切れのいい編集をもってしてもこの類の作品は苦手だった。撮影がたけなわになった頃合いに頼んだ。「先生、ただの連続殺人の謎解きじゃつまらない。セリフを足してください」

手前味噌とそしられようと。82年夏の市川監督の電話はいつもより威勢が悪かった。「ミスキャストなんやけど、しゃーない。出てや」「どんな役ですか」「細雪の長女や」「先生、それは無理。私音痴だから大阪弁っぽい訛りができないし、あの姉娘は山本富士子さんがびったりです」「そやねん。お富士さんの



4姉妹の長女役で出演した「細雪」

夫が生ませた子を次々と殺してゆく温泉宿の女将が罪状を告白する場面で、私は脚本にはないセリフを言った。「酷い男と分かってても、好きやった……。どうしても忘れられまへんのか」

役やねん。けど都合があつて出られへん。東宝の社長が岸恵子でなきゃダメだと言っている。あなたには無理やと思うけど、しゃーない。お富士さんの代わりやってや」

の脚本を渡された。以来、市川監督は事務所も通さず、パリの私に直接電話をかけるのが習わしになっていた。

「悪魔の手毬唄」の時の会話はこんなふうだった。

「今度は殺人鬼や」「え、人殺し?」「それも5人や」

私は数あるこのシリーズでこの一言が「悪魔の手毬唄」をただのミステリーに終わらせず、切なさを添える人情物にしたと思っっている。たとえ

だけれど、大変な役回りをやる羽目になった。NHKの大河ドラマ「おんな太閤記」で人気を博していた佐久間良子さんが物語の中心になる次女

(女優)